茶湯生花[illegible]　め

474

797
E5a

7047

茶之湯真臺子四之巻目録

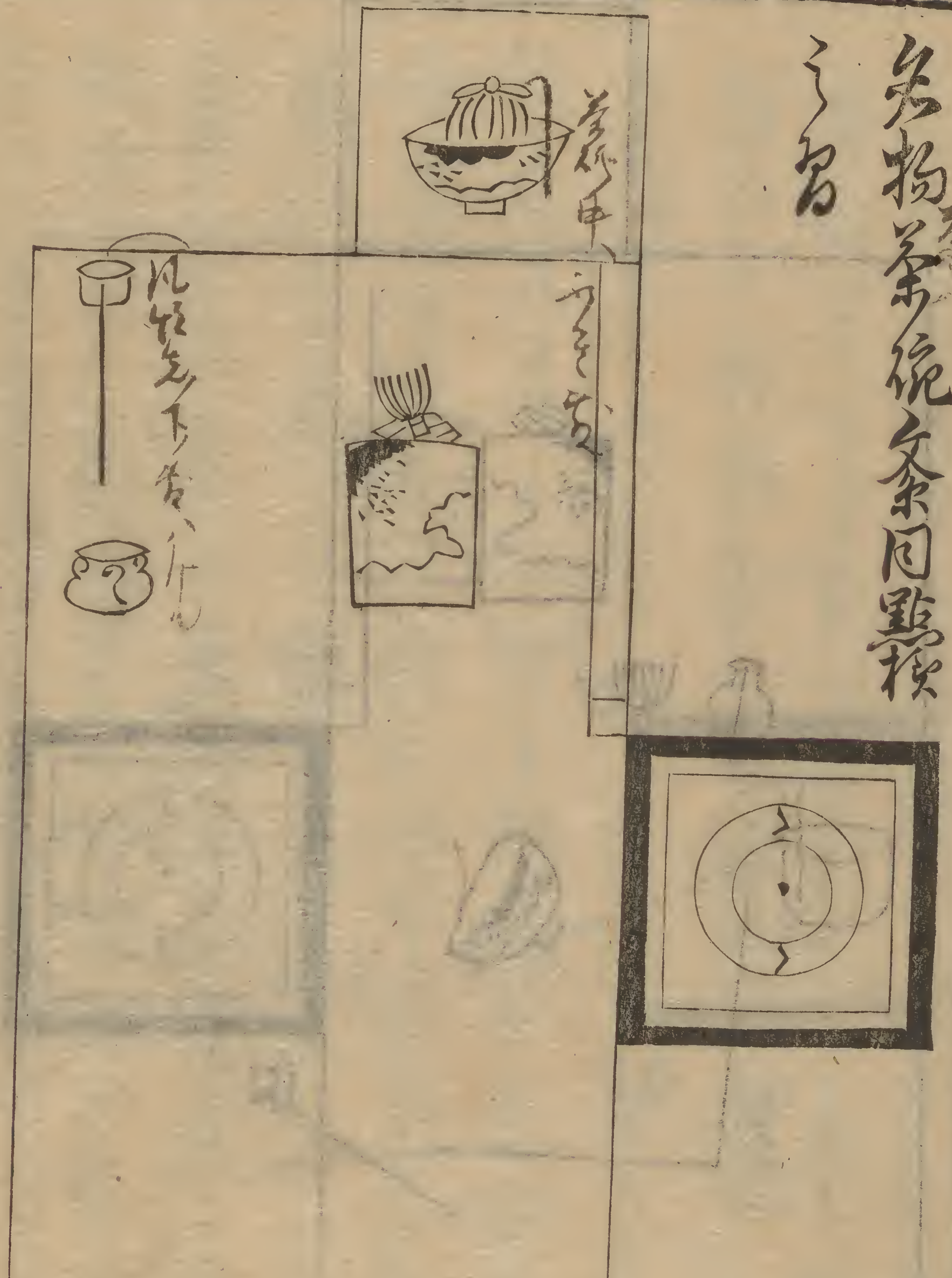
名物茶碗棗同點様之習
栖樓棚棗之数浅貿茶碗之習
袋棚茶杓筒荘釣瓶水指蟹蓋置習
炉臺子真手桶油桶茶入垣桶茶碗
栄螺几蓋置
名水茶之湯
中子盆并余会林寺茶通并茶杓拵要文
帛の習
麦風爐釜蓋の二ツ習

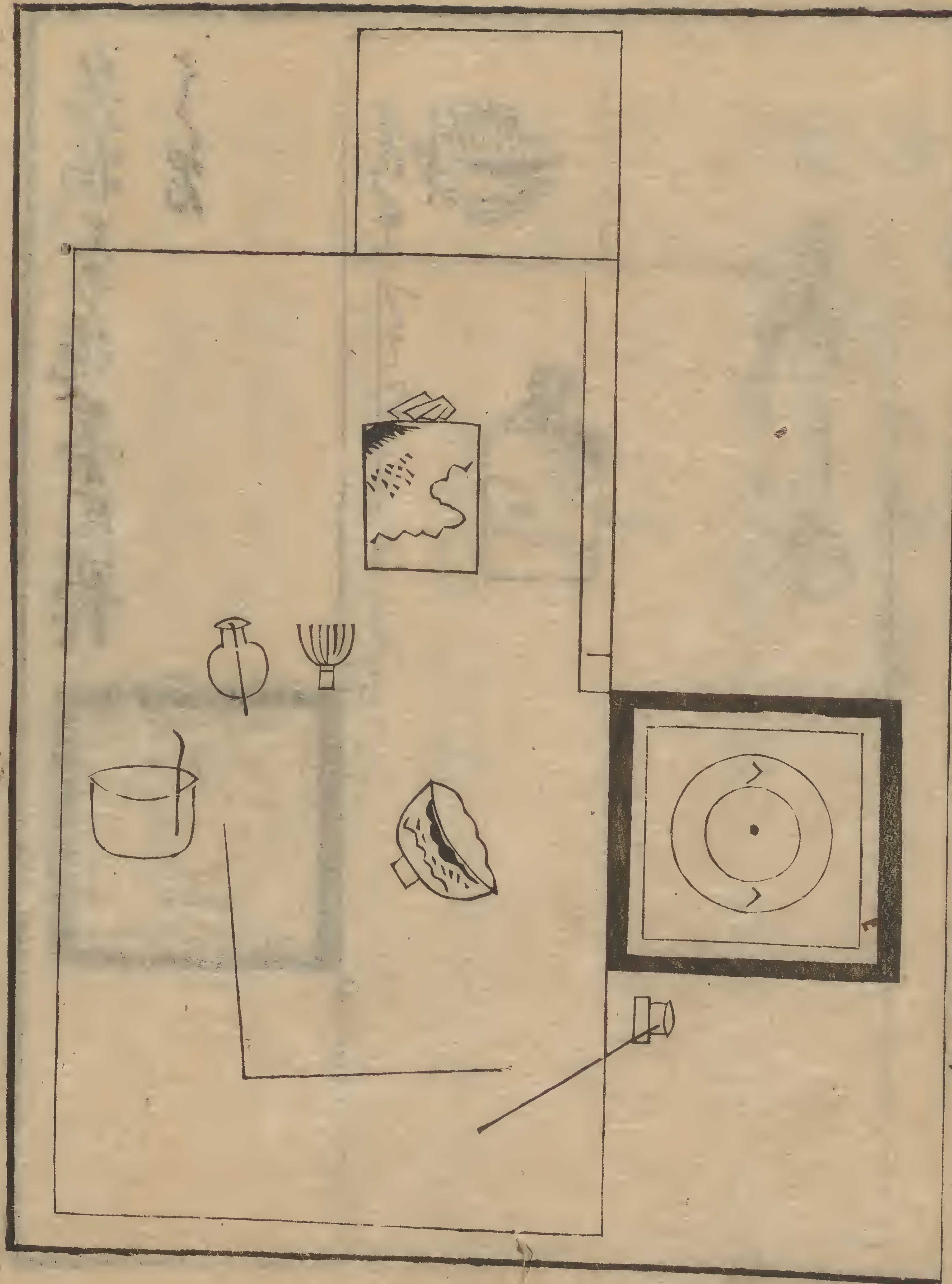
茶入仕服之習

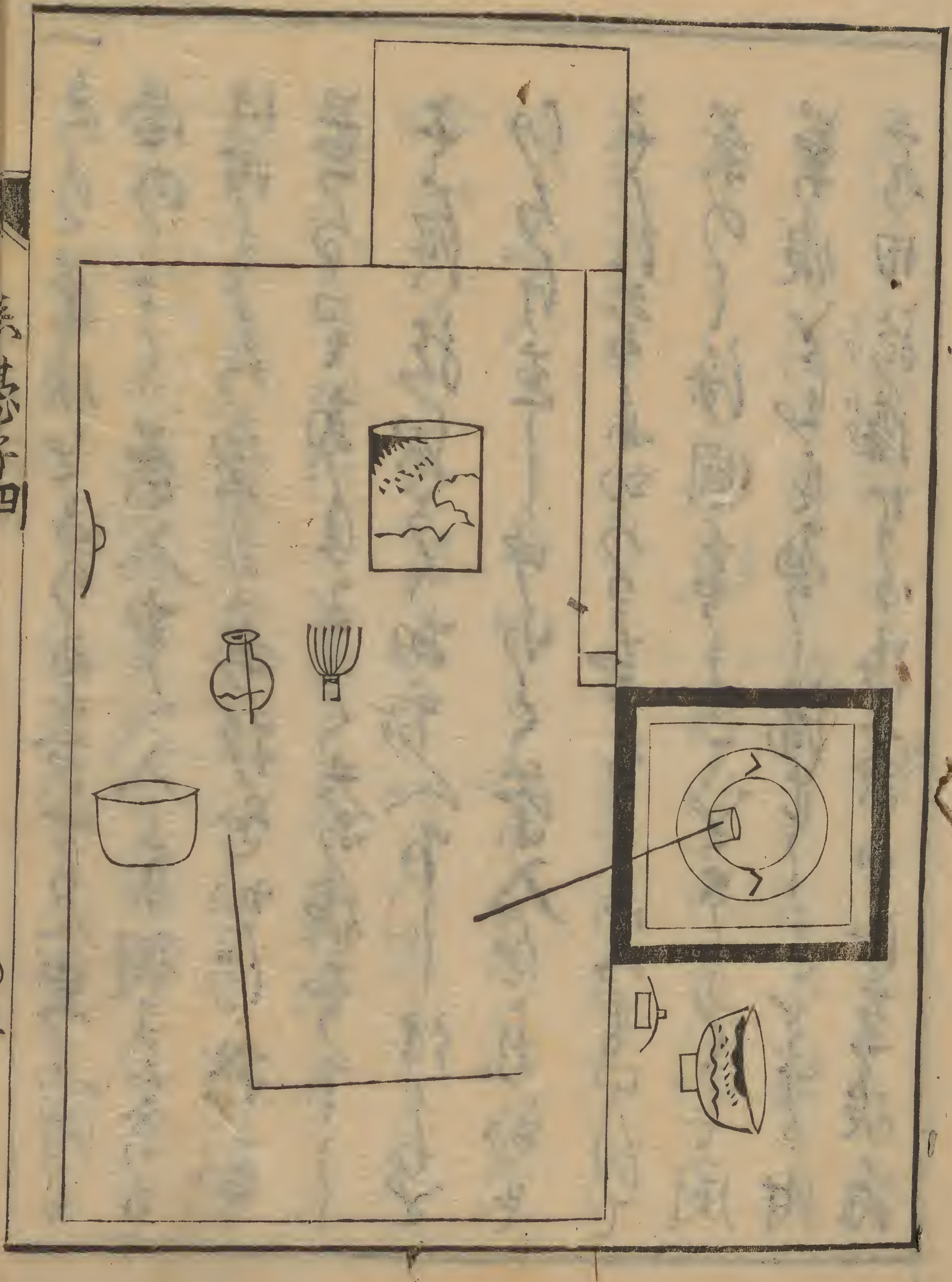
論識點之習

名物茶碗之茶同點様

之習



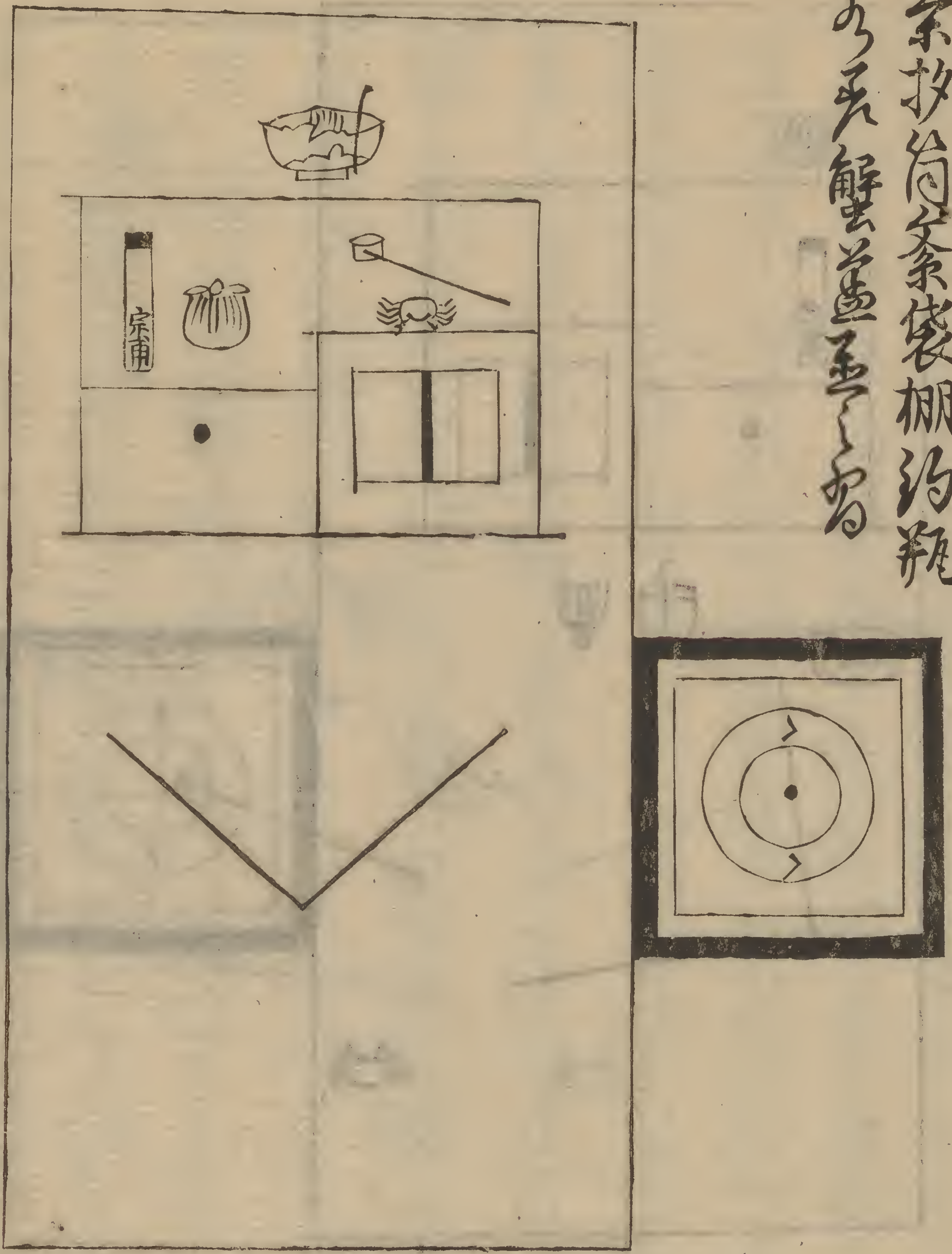




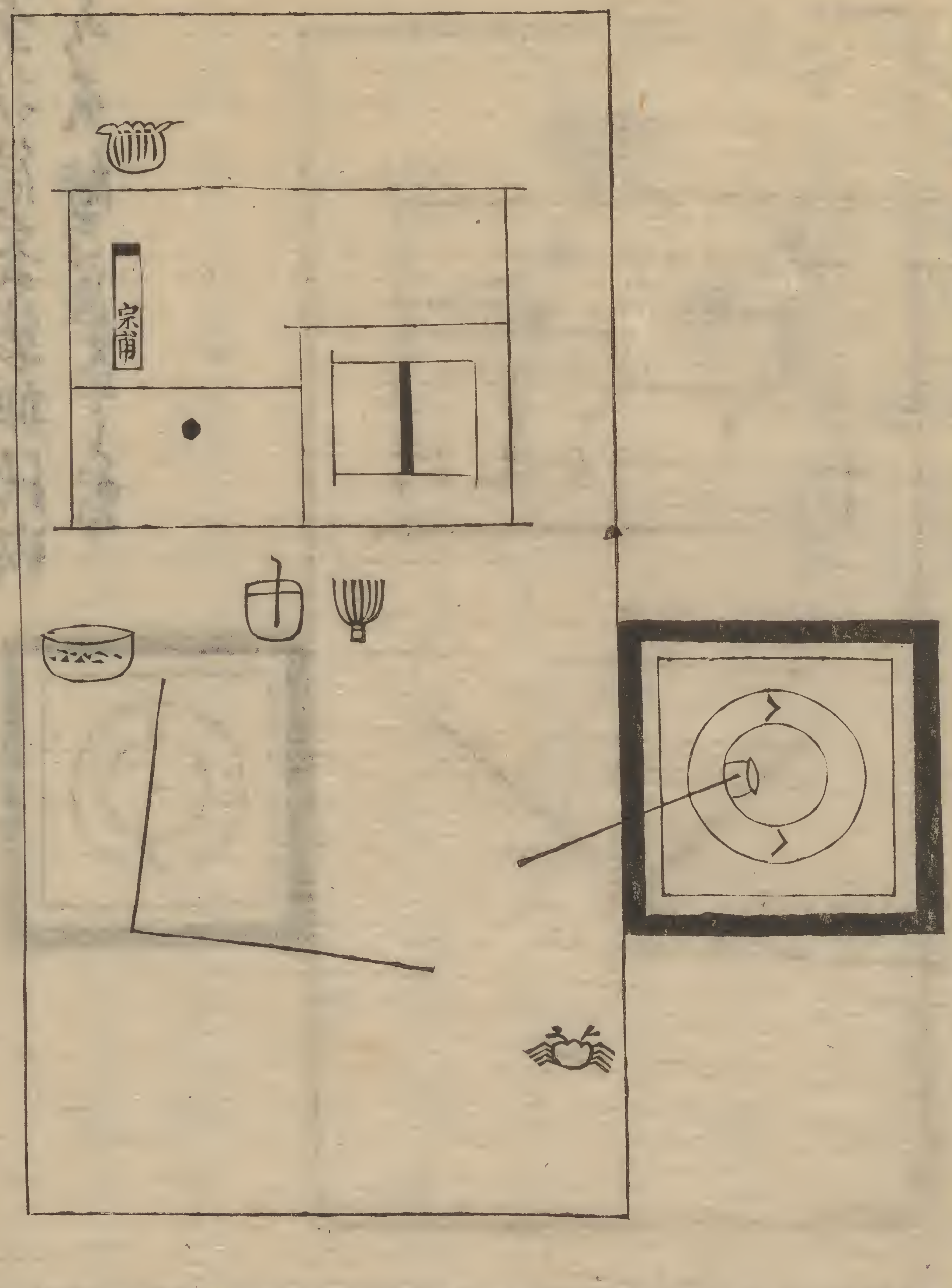
一先にて茶碗をとりに参りて置了附ら
器のごとく茶入中へ入角棚よ参る
此時ニ而盆ニ茶杓をかけおき
茶筅を置事のごとく茶碗を下し
手に取能紙のごとく板段へ下し仕かけを
ひろけおし中かく茶入をとりおきと
それ常のかわり参らし家も口にて
茶のこと濃園まつてとさしくと閑
茶碗と出し廻し湯をさしとする時
家の田能掛かつにて茶碗箱

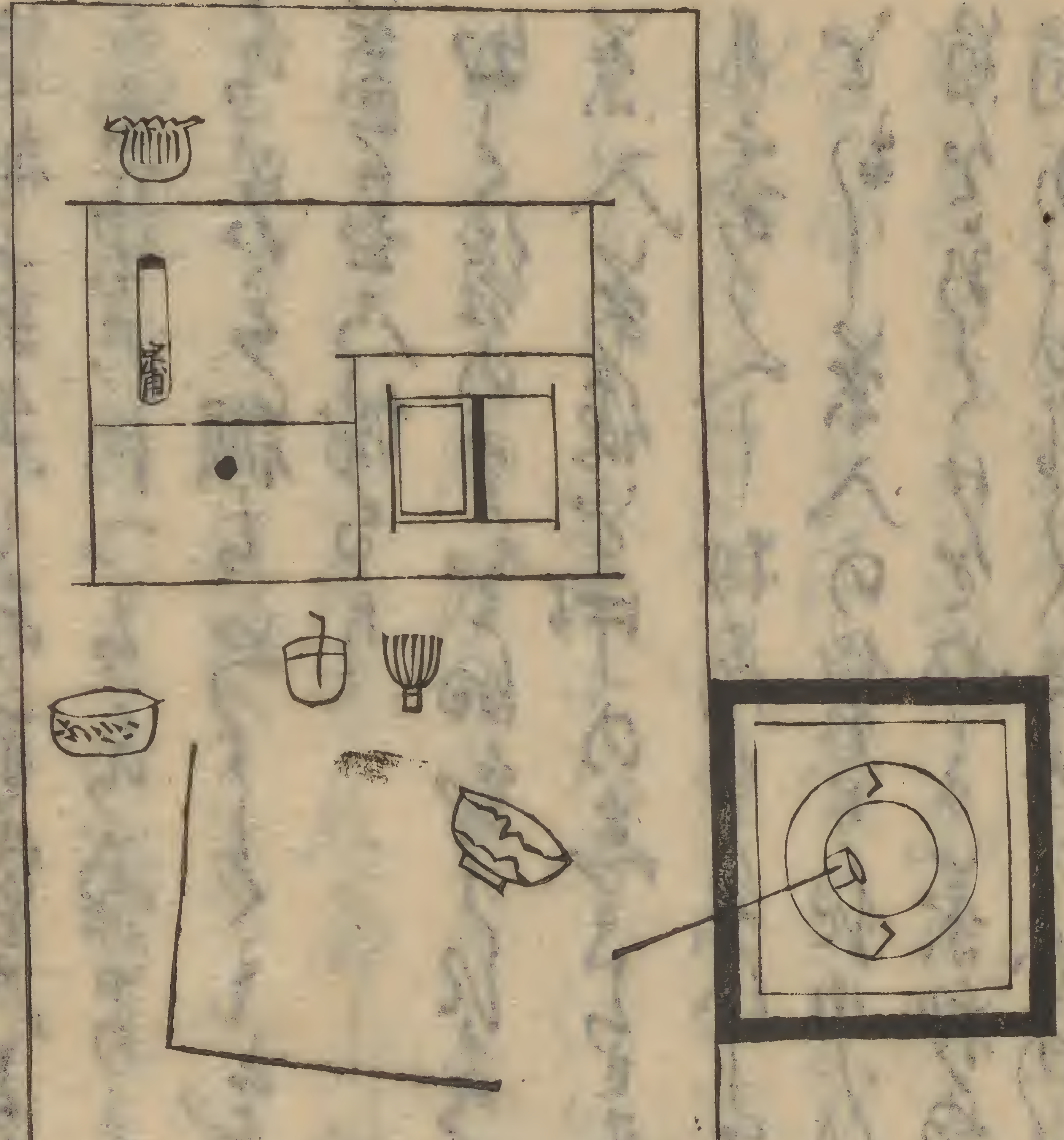
見ていし於ゐても園がまのごとく茶碗
取并仕にて茶碗をはおてゐて
宜しき拂遇しあいさつ又湯すき
茶釜まとさとして茶巾みてよく
吸湯乃ごとく出しあとおへ
何儀をこよ又花下る寛ら所て
釜へ水を入蓋しめ茶巾そ添え
ことなるの茶蓋して湯のごとく茶釜
中のそをこ茶入をうへあいさつ
まづ常のごとく出しおくべし はじめハ

茶杓筒茶袋棚釣瓶
手長盤蓋置五徳



右棚に飾しむつかしき功者乃入事
なる程は略あるへし


宗甫


宗甫

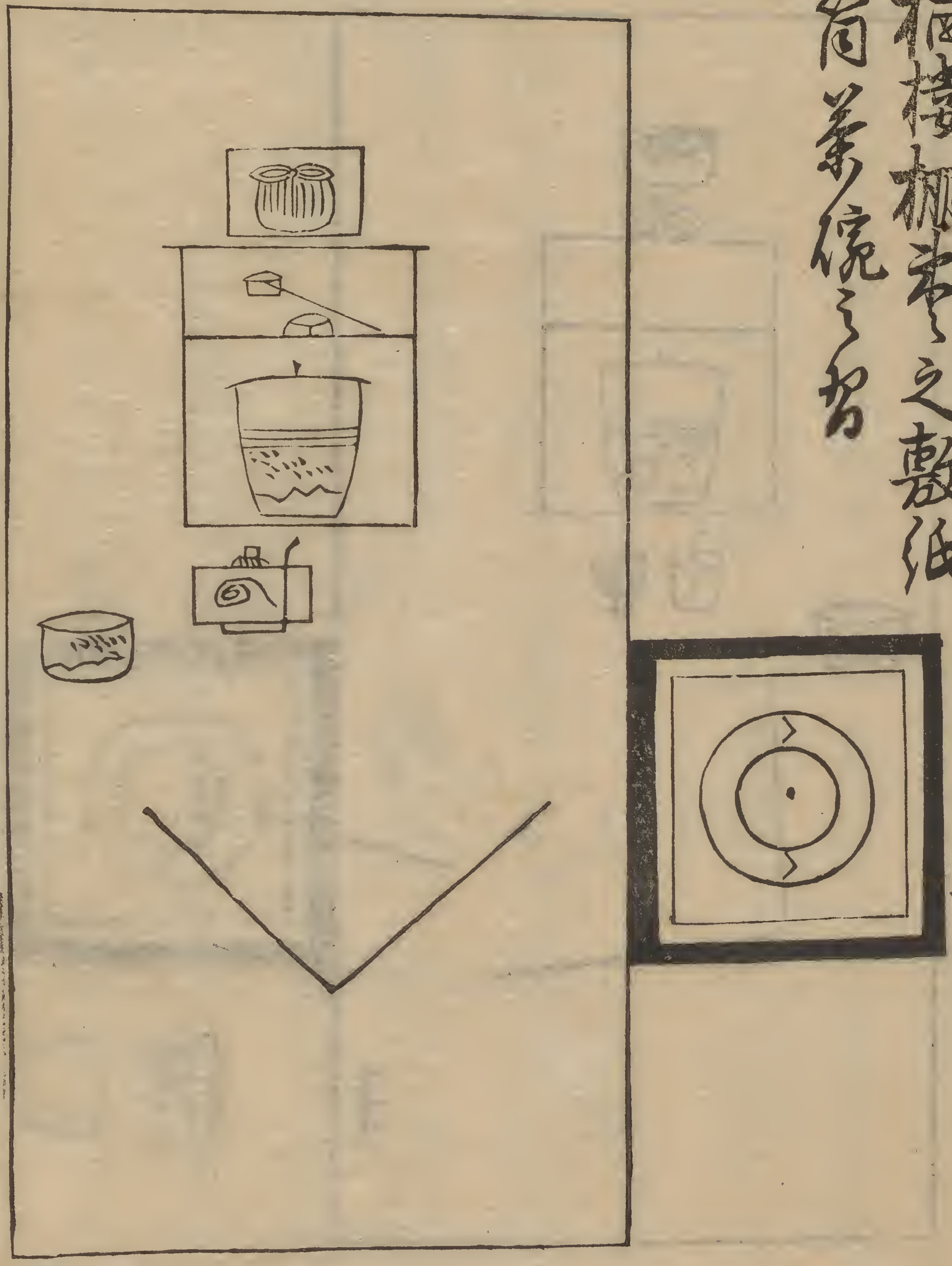
一袋棚茶会多くあれバ袋乃ことを委棚
ニ云袋乃内へハ茶盃中へくを入る
手茶入ハ棚ニおくもよろしく
茶盃ハ手元乃場なり
一出しく袋の戸を開きにして茶碗を
茶入茶碗を中の志きりに置く
に茶入へし扨居をうつして茶碗
をおし茶入の袋を取巾ひ茶杓
筒をひらく口をぬぐい茶杓ぬぐいとおし
筒あとのごとく置きのもとく

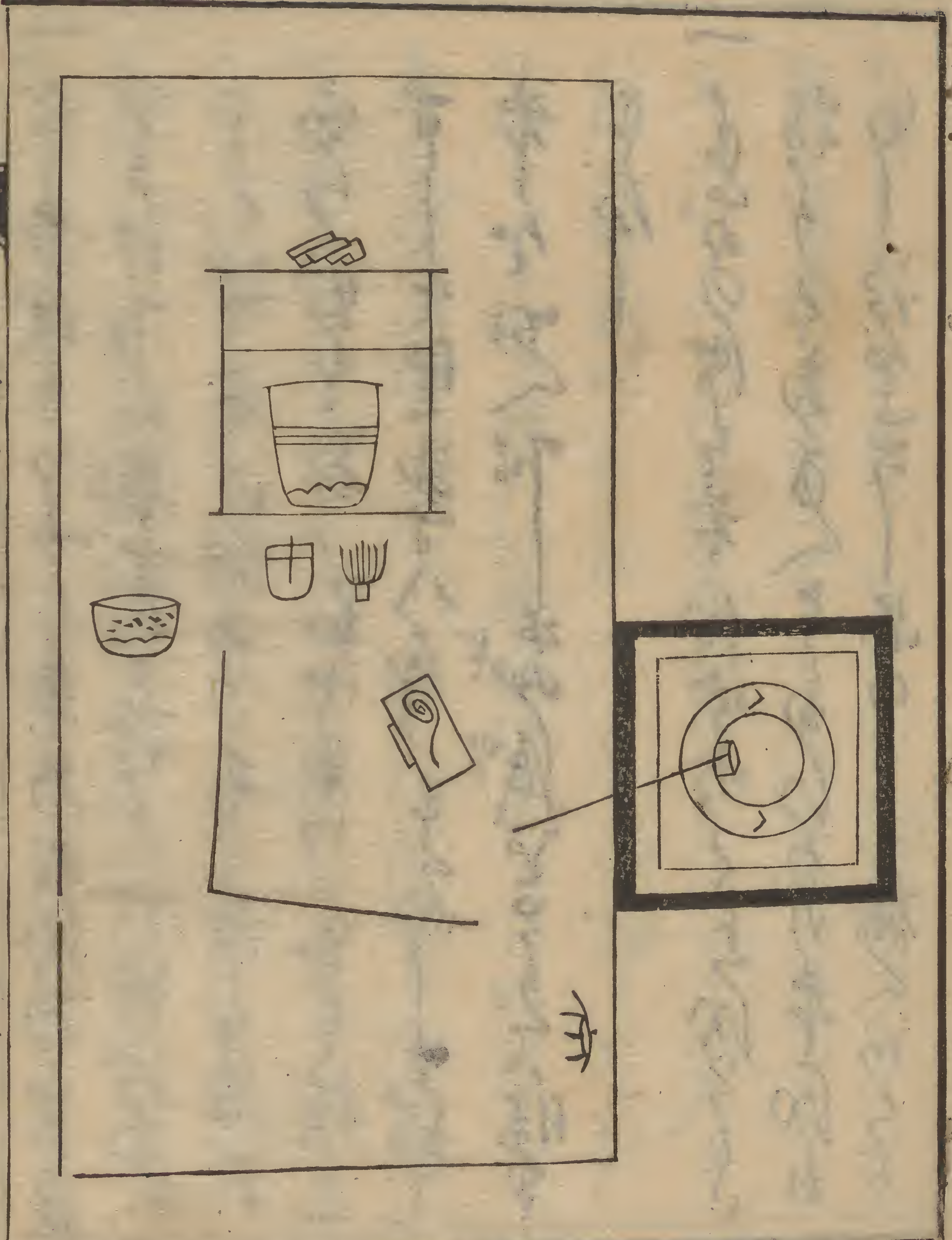
たゝみへ上ヶ盃茶碗茶筅ともへ茶巾にて拭
扨茶盃をおろし湯のごとく横に
置ひして柄杓ニ常乃ごとくおのれの
一猿飛乃茶盃の取様ハ向の方へ手に
うちつけく茶盃へ七八分引出しかの
出す處の盃ハ中よく取放し
行くのこへ寄て取盃し時々順
一大半乃口傳なり
一猿飛ハ其のまゝ乃柄かゞみてさしあ
なりとよりうけくさうまで寄付

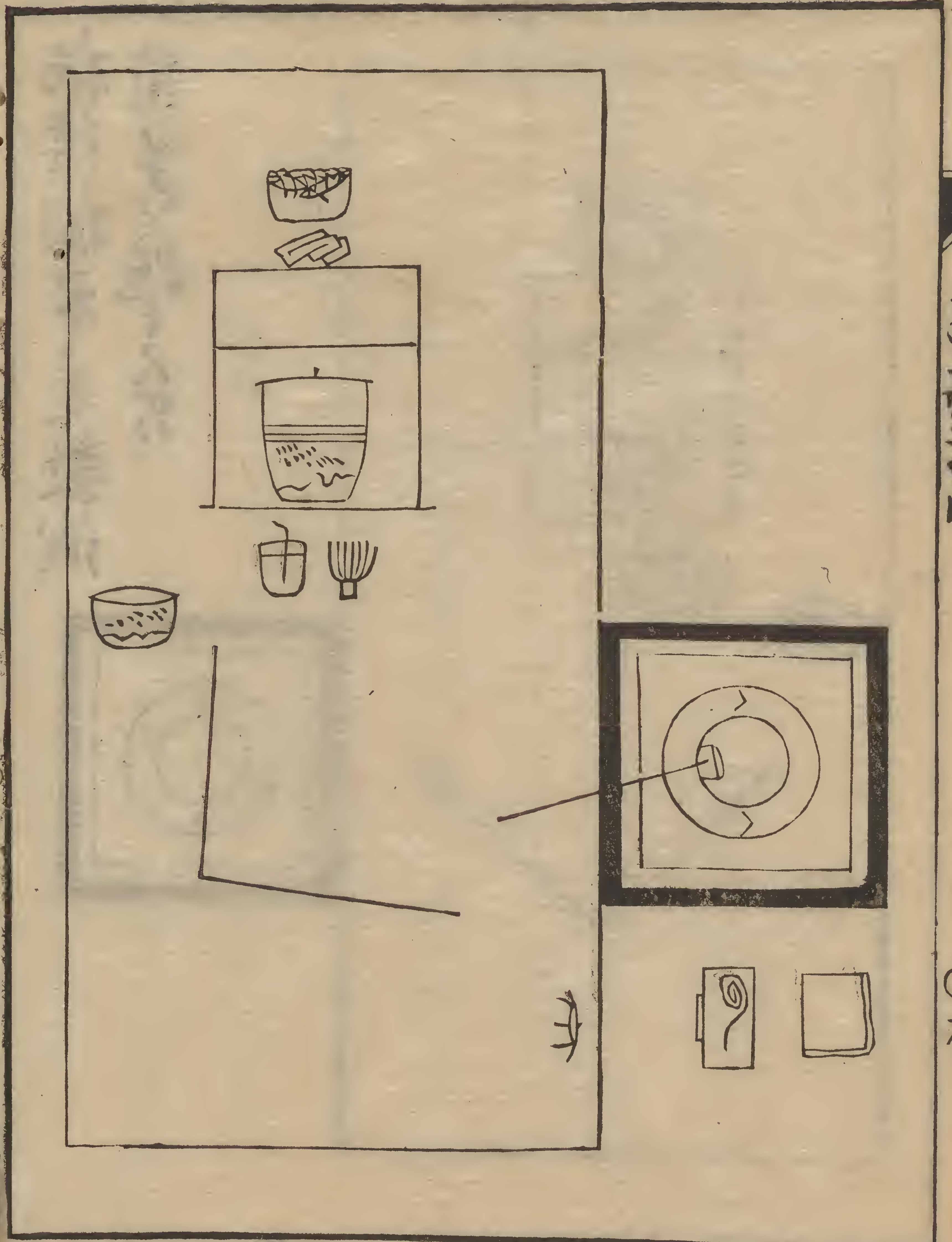
なる程ゝさめ乃さひの出てくるは
壽振ともいふなりとも
一 茶杓ハ先出し手を拭ひ箔もすれ
はけて茶入ハ右の手に子ある如き
茶杓と壽振の次なり又張ニテゝと
乃茶杓の所にては右より帛にふき
て出すへし是貴人の為也
一 家振舞ハ茶杓と箔を合て
帛にのせくはへ出すへし亭主ハ附
手にもよせて帛芸にて取次

手あり口傳多し
箔のうちに置箔にめくり置て紙をたゝみ置を
其しとかさねて客の入へし
御翫器ニて拵振ぬにもみ中よ
ことく相板志やうくんと主る

栖楼棚ゟ之敷紙
筒茶碗之習







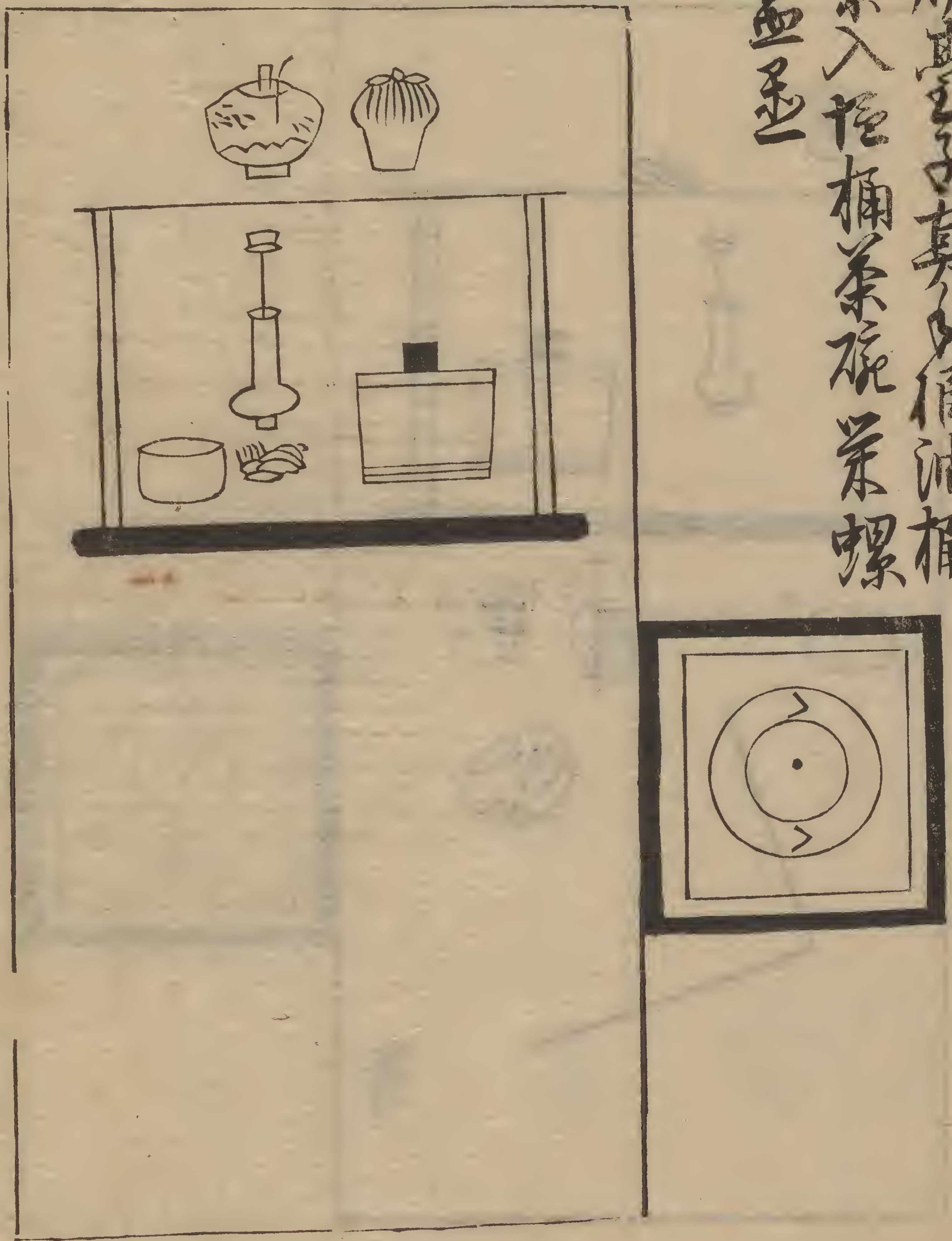
一 香合といふハ棗乃時代物小なる
をうけたる奉書(ホウシヨ)を折て料紙にあへ
しく袋の胴二寸ある時ハ結ひ又
包てあとに包てあとに包て横三
すじして置紙寸八分と書て先をて
帯にて下(シタ)へ陥(ヨロ)し敷(シキ)紙(カミ)をとりて懐中
すべし

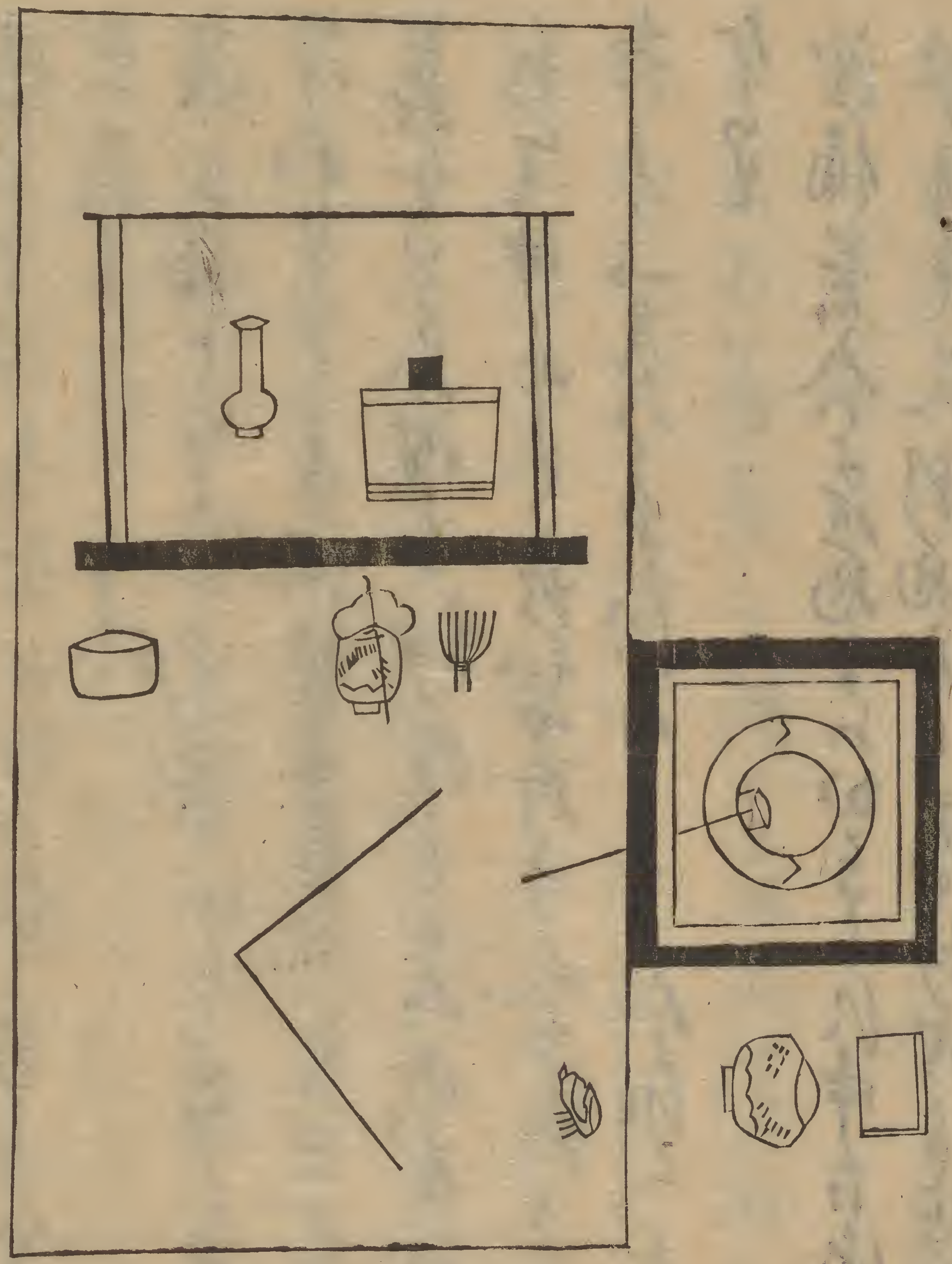
一 上茶の時ハ常は中あくよく拭ふて
拭くへしあけ茶碗の内をふきとり
出し紙を重ね器のよく棚へならべる

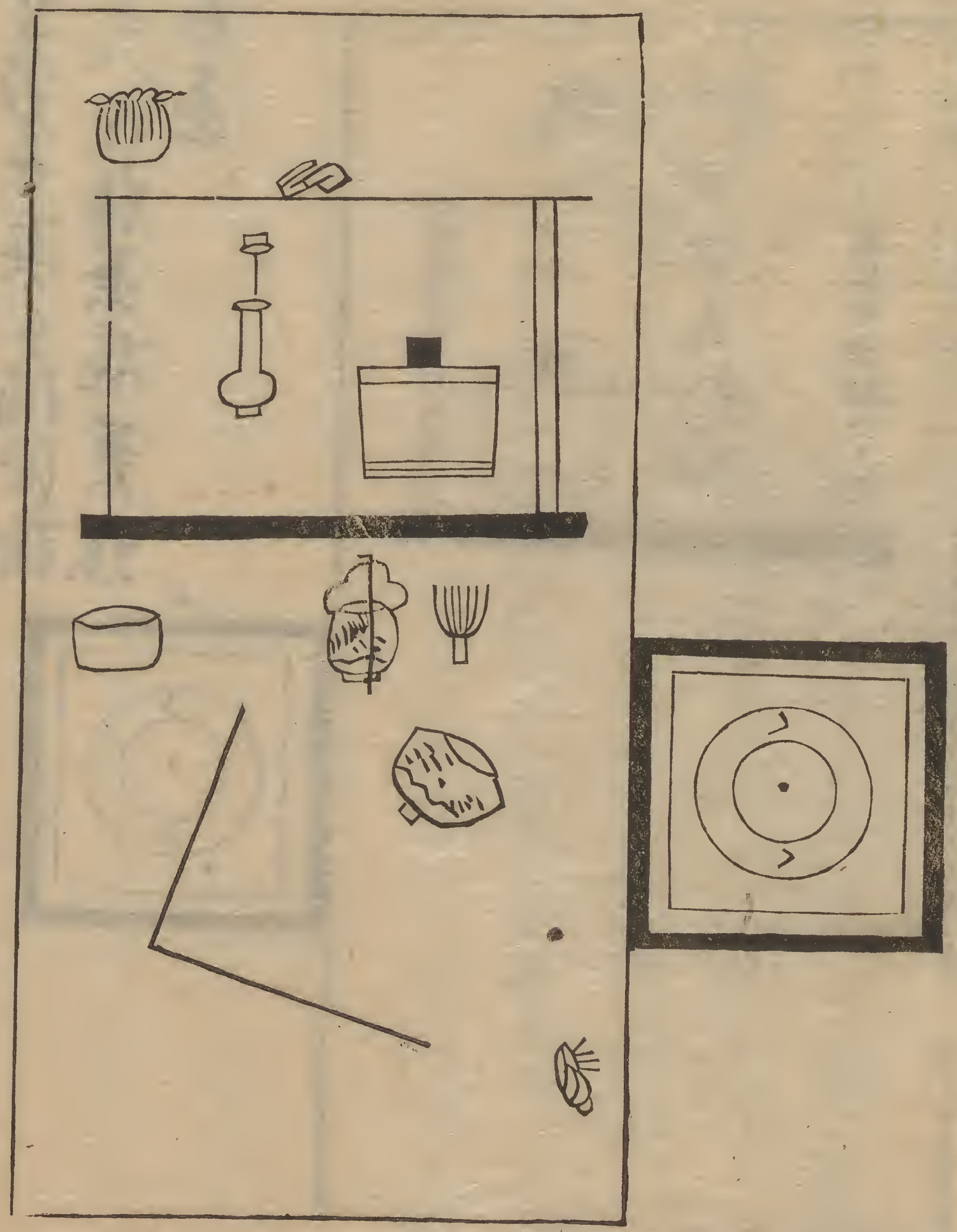
なつめとそれハ常の茶にあたり
一 茶筅を内へさくり其茶巾にてよくし
そのうへに茶碗へ茶杓のわき入る
一 茶碗の内を茶筅にてよくふき
先をつかひ茶をかけて
はさみ茶巾を中へ入る其後に茶巾をおき
て茶巾を中へ入る常のごとく
くしへし又濯(コサメ)も茶巾をよく
あらひ中へ入て拭ひ
折中へ入て又に入してしまうべし

右茶器を置へ見るより
一 次茶碗に先茶杓を先初して置
蓋しより柄杓を次にもへ見るなどを
茶碗に風呂ふくろの落ほれ
やうくちのつくるい中しをする

炉臺子真ノ備 池桶
茶入 柄杓 茶碗 茶螺
蓋置





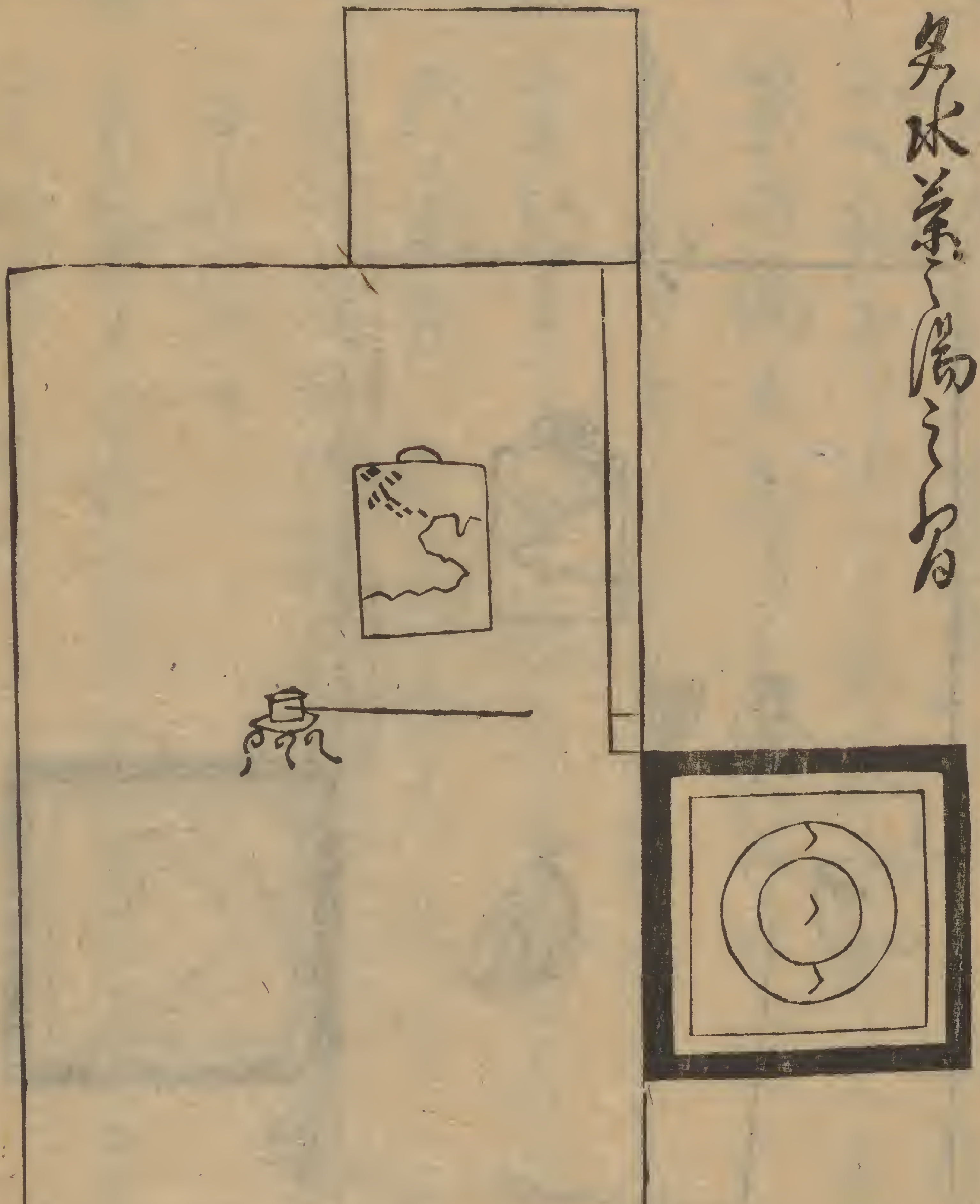


一甚子と炉の茶弁附ハ炉甚子のや
云荘りのことし
一真の手桶といふハ黒塗にして古き也
有物なるにより登り不塗ハおろそにて
蓋を置る附に切附と云のしかは
それて中へ入れるかた尽して下へ之るにあらし
却して一尺ハるにはあくるともいう也
なり
一沖桶茶入ハ房所をかさしに中古流
戸ハ又新物なもを切附と茶

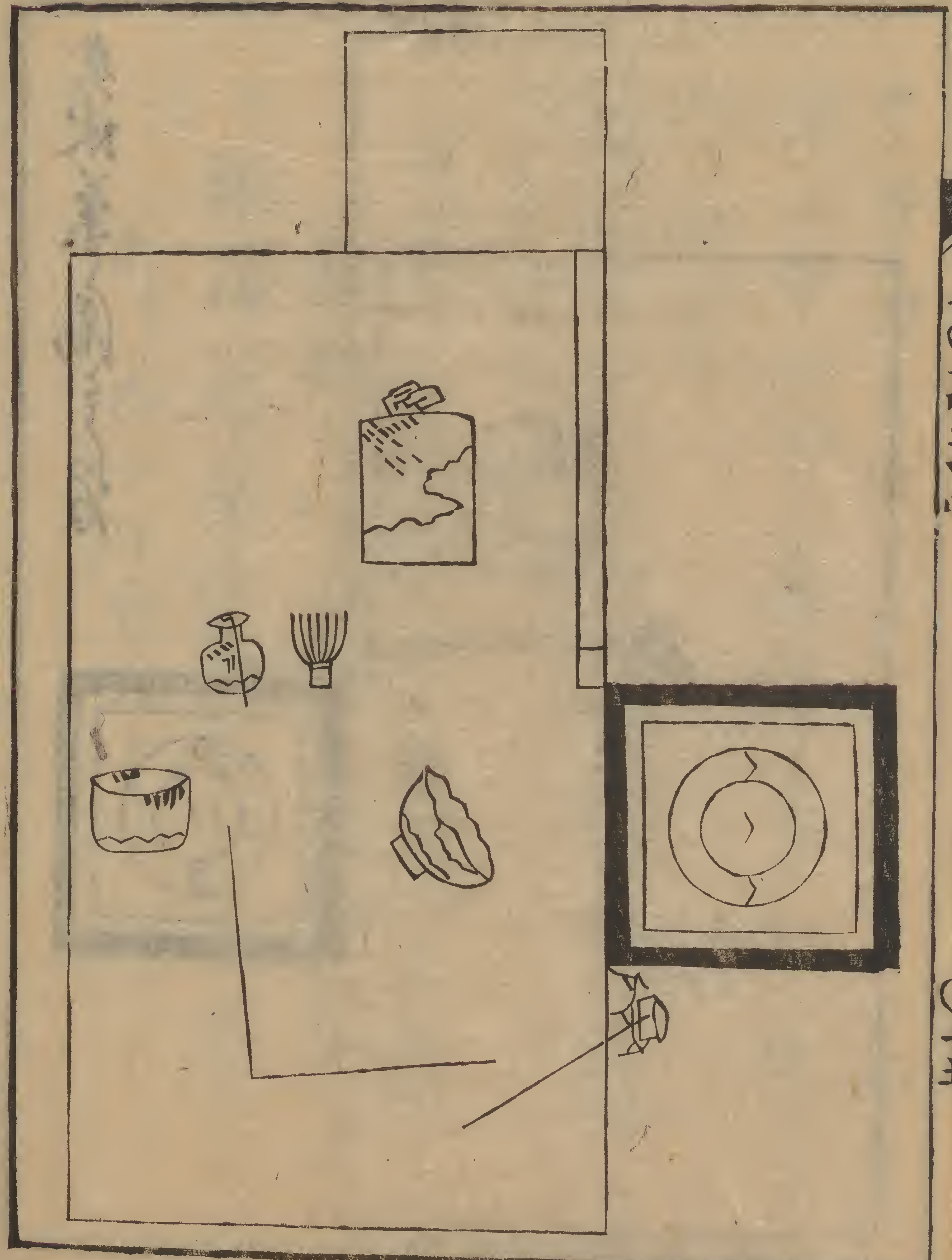
拭と清のの心かりくふに茶筌を同様
みのまくへ却く也
一さいの蓋置に棚よ有ものは角乃
方をとへくして却へし子細はさいに
海の底ふ附に角をとへくして出れハ
あつくゆくへ左のあ置附にくのよし
茶筌蓋附に口のまはとへくして却也
兎したなくて茶のふさ乃出かり
あしきゆくへなり柄杓の茶碗に
指茶碗と同しなり皆きりの茶

中〻何も申まで先に申しおきぬ
條に申すへし茶碗もくいさぬ下
入らなき
大のかりもあやうき事なく
とさ給ひて
つゝつゝと御楯の茶入くるはへ
茶筋ろしをつまかくされ
垣桶筒茶ののこやうなさるへて
あとの一口もんとのしへし

名水茶湯之図

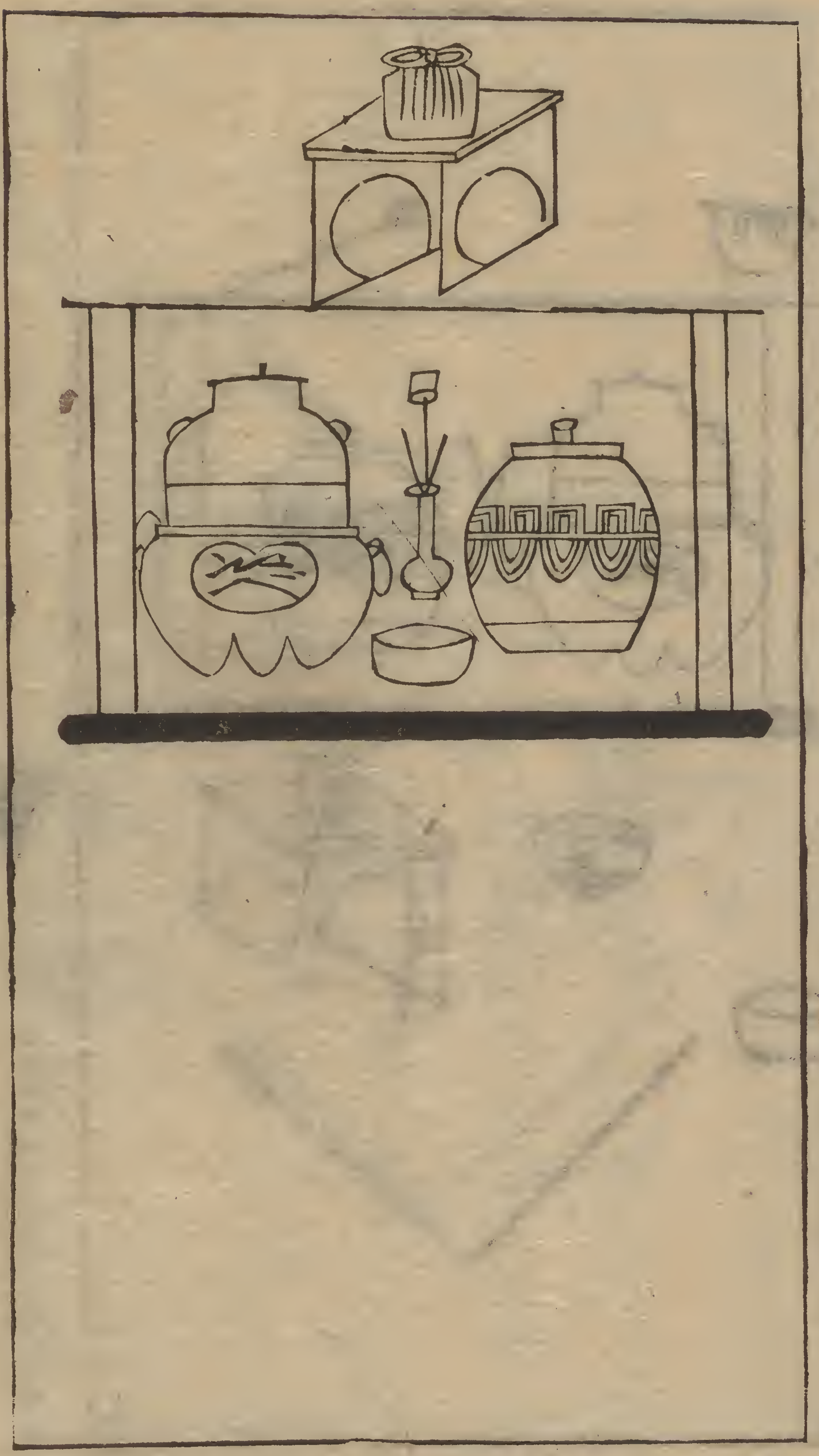


一 かのことく蓋置にしやく条たる所ハ
又掬(キク)振(フリ)なりあまり是水と糸く示法
茶の湯にお中と持をいふへし
是水にいふことハ不断ニ是水汲置を是てハ
京都ニてハ宇治の三の間の水御
乃水たりとも尼(アミ)寺(テラ)の水なりとも是水
ならす掬振ニ湯を汲ましてのむ
ものなり
一 まへのことくかるきすミ御手のかさ
ねをあらひ候さくかし

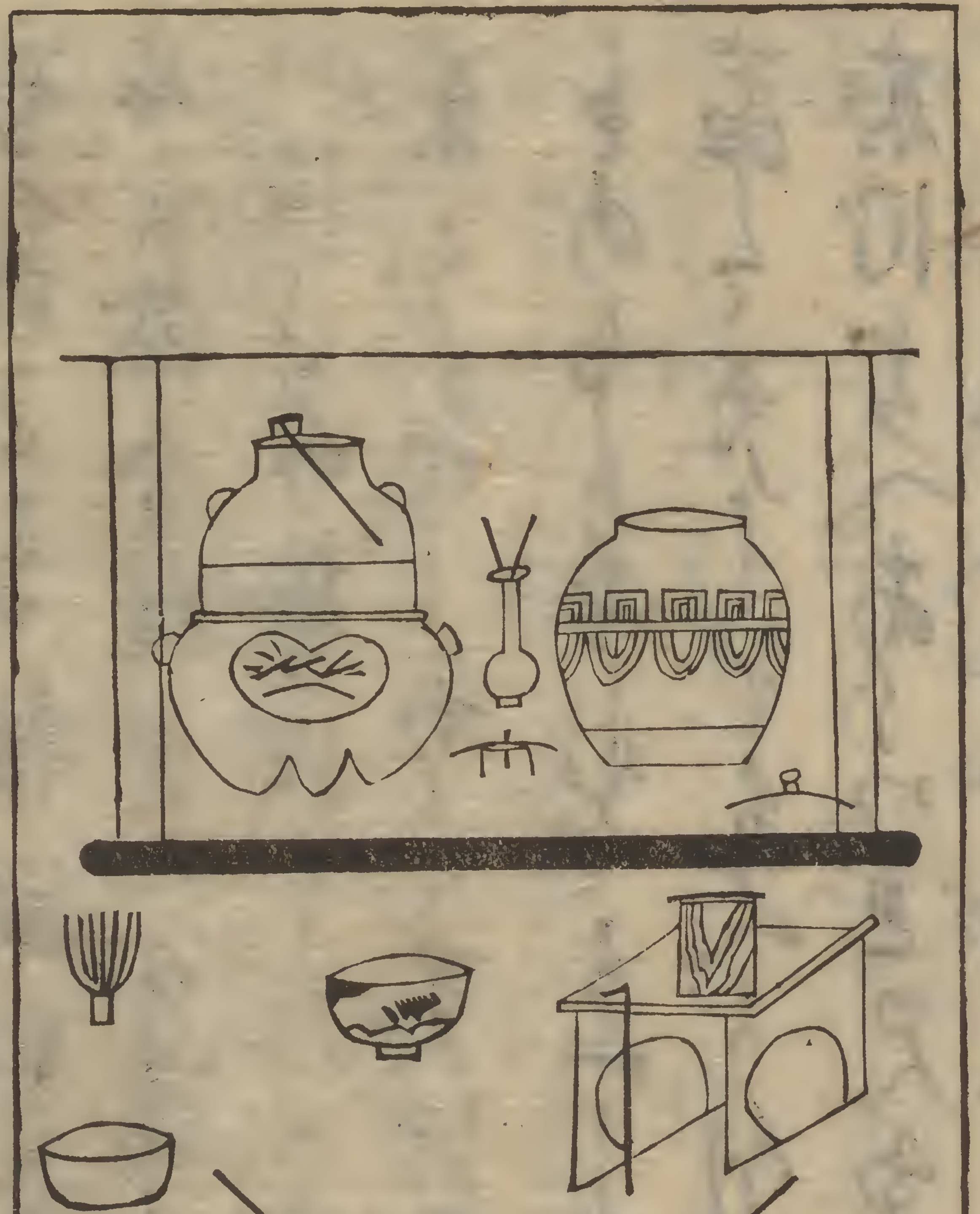


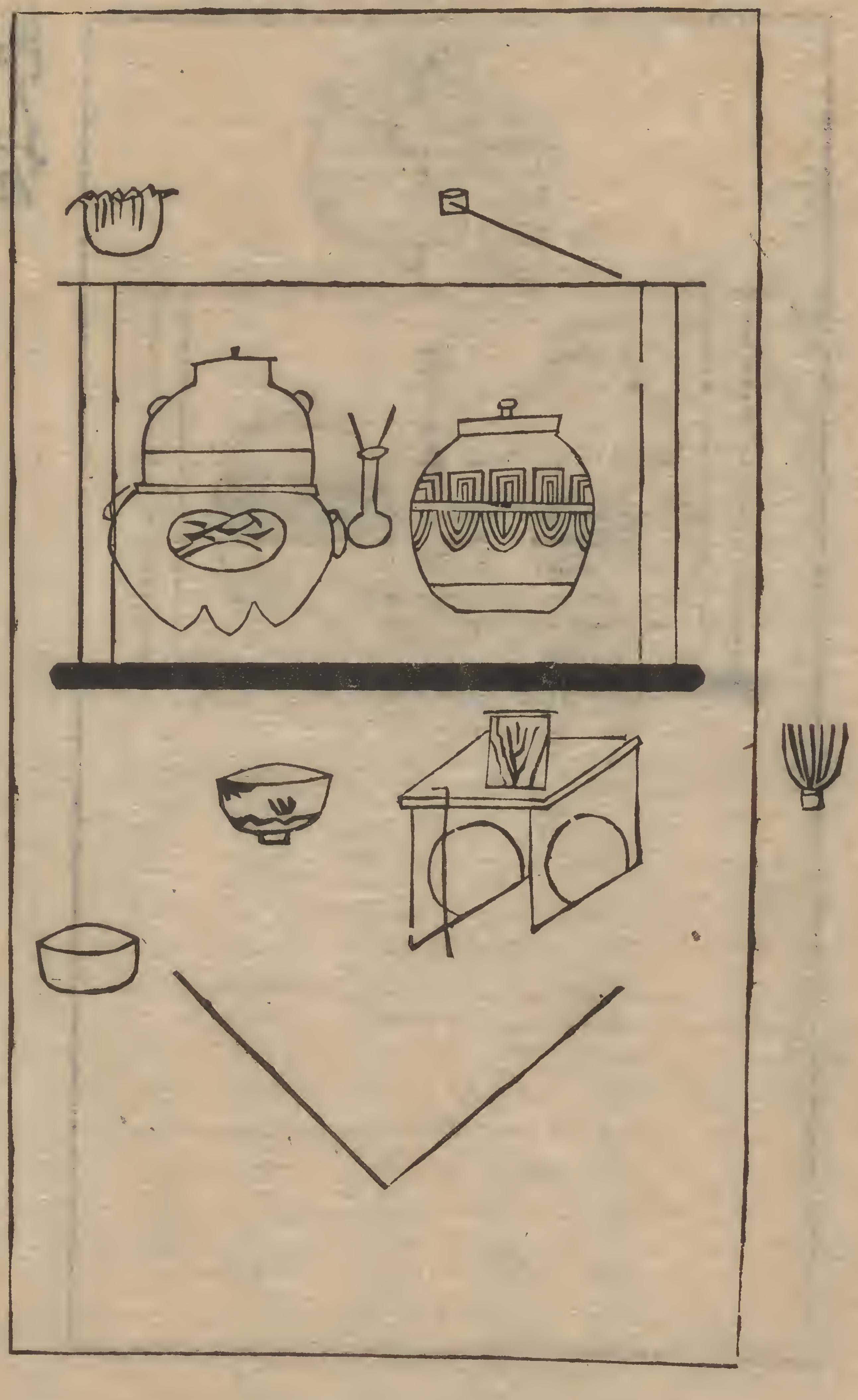
巾子盆
掛え入れし
金林寺の
大わらし見て
大小有之

巾子盆にハ茶金林寺茶通并茶杓然不付
帛紗



茶水乃のるとい湯よくのし
今臭おりしやうりかりもす



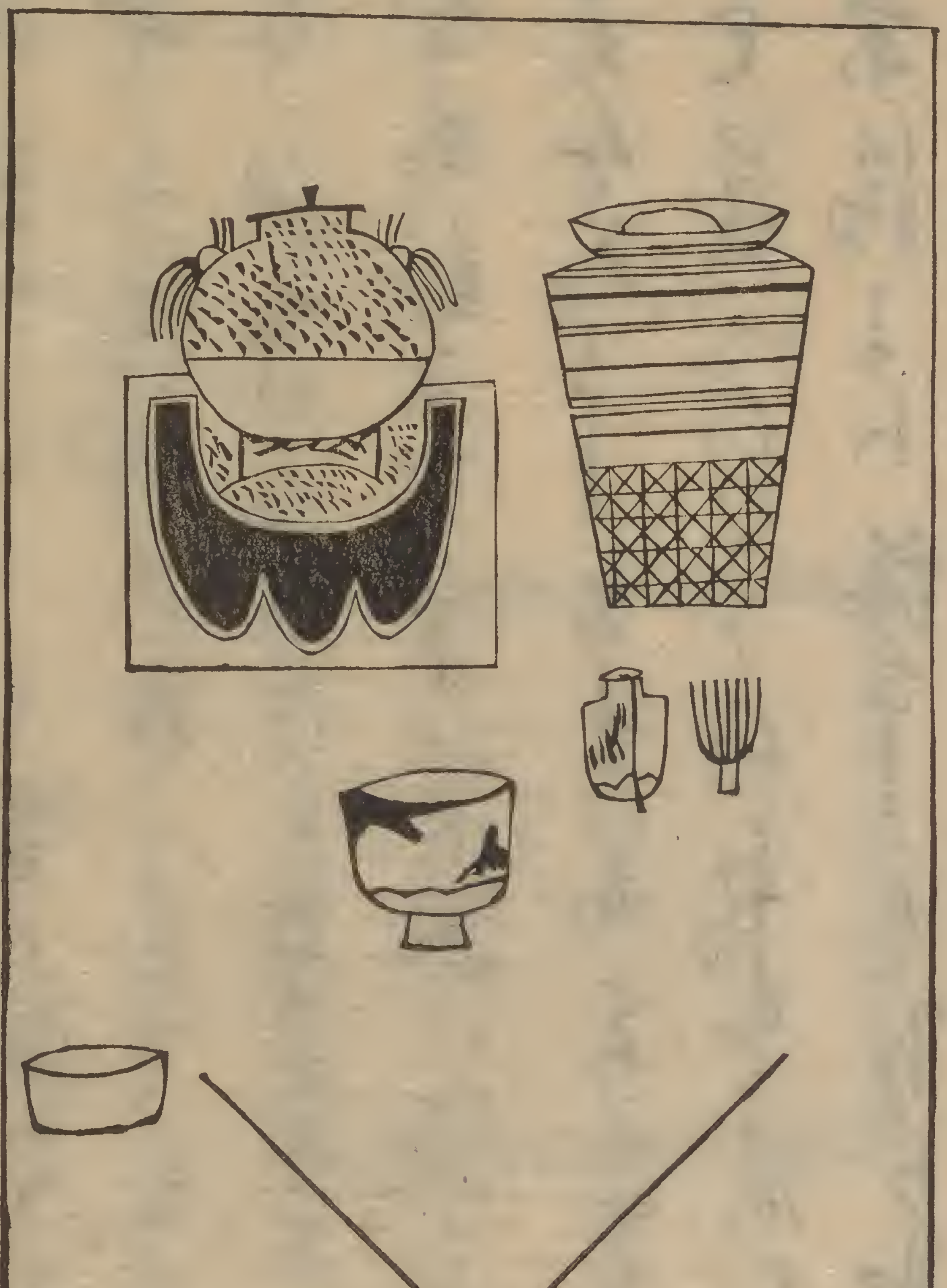


一今林寺茶通とハ頭切のこと
吉野よりも後醍醐天皇の勅作
にて御今林寺へ遣よりなる木
ハ作さの根にしたるものあり根
来うふ新しふくすれたるしやう
とのもりを小をうつしてせふあるる
蓋を乃よりまおへよりも出るろ抱く
木目よくあへつまりりあるなる香
乃勅作なれ巾子盆次るまよみろ
なるも之の於も本柴乃ちもそなる

盆鉢のことくはうひふまるあり時附
乃帛ら相も通の白く帛をつうよ
為して見るとも勅作中へ白か茶杓
の分根ハ蜀の云く巾子盆の絹
ふりも也遁る茶代盆鉢のかく
にあて成るへし茶代出しと附ハ
御帛をおふさものへも共代
出るへし白帛を遣すハ今林寺
茶通あれあつらふ内ハ白帛なり
又勅作なりとも大樹父の津作と

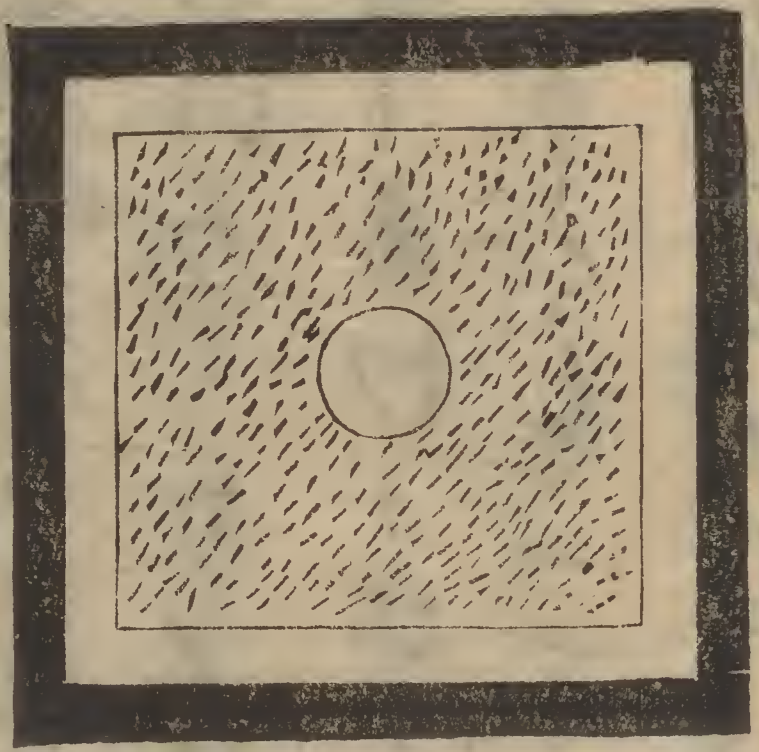
はやり世に南天の根ありといふ人あ
りとも相伝なきの根ありや
一客振廻に中々置合すへからす事を
さほとに無とも引寄置てよし
て見てくらへ相伝しらすなる事を
口傳の文あり

茶風炉釜蓋二つ置



花ハト
天井ある所にかけへし

茶入湯気取之図

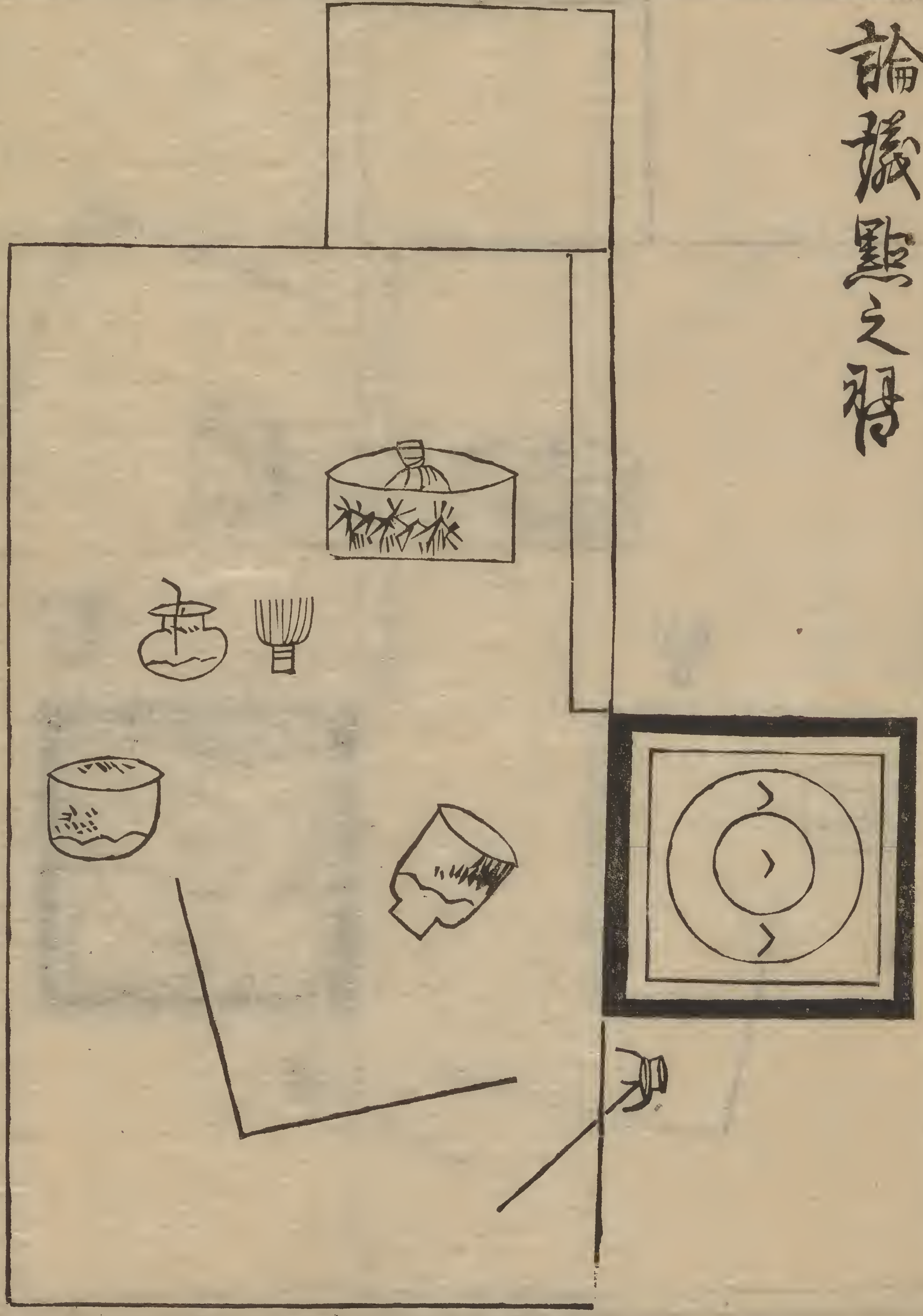


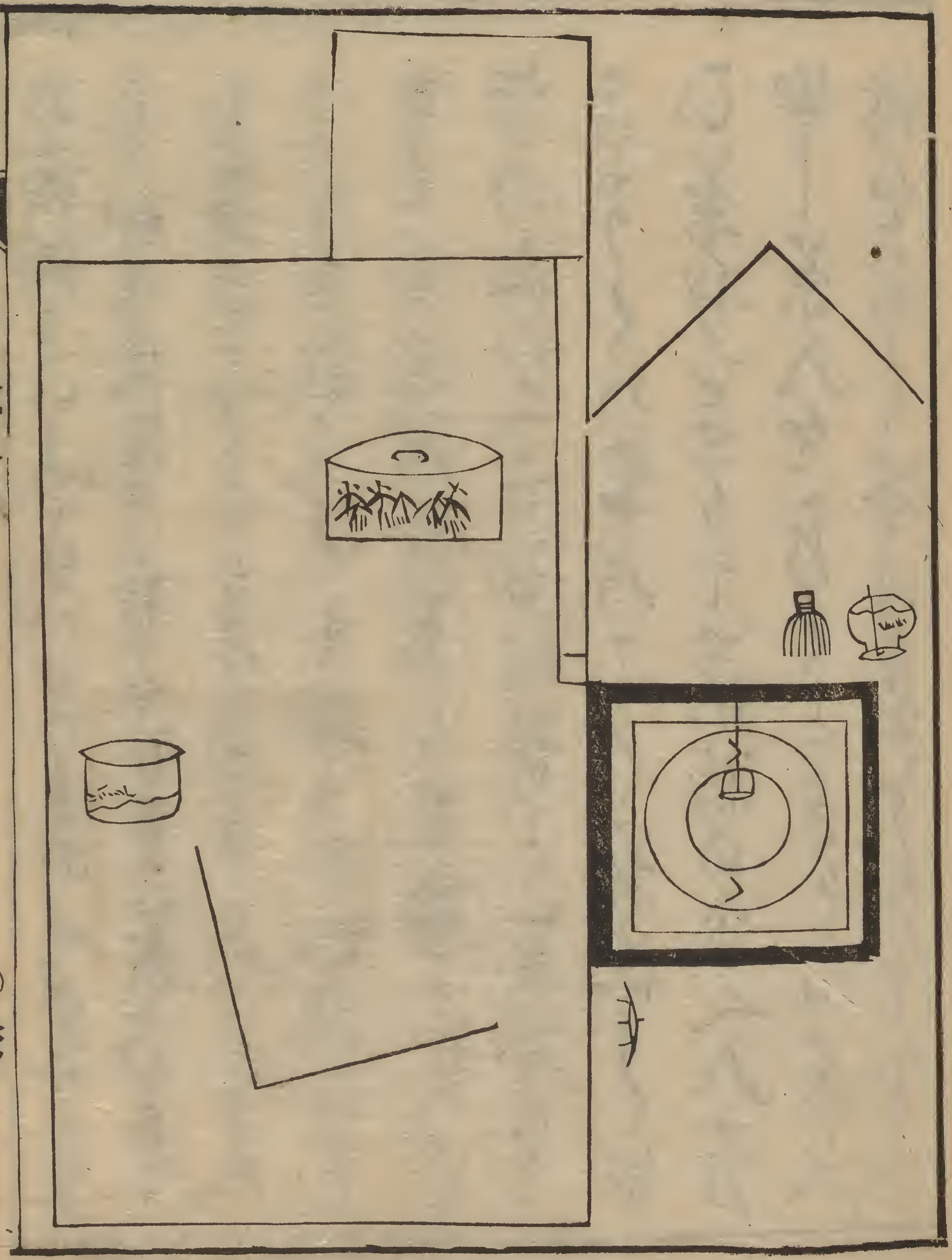
一 茶事朝かよりは十五日まであゐ
風炉へかくるとき布巾なるを絹かよ
破とも極暑の時ならずても天井乃
なれ床にありてハ茶がみ釜の蓋
をあけるなり子細ハ床に掃除の
ときを入るとき先茶よりはまかせて
とも蓋へハりうの気をとく又ほうの
茶湯より掃除よりも可ら年頃
付ゆくよ釜の茶此あけるなり

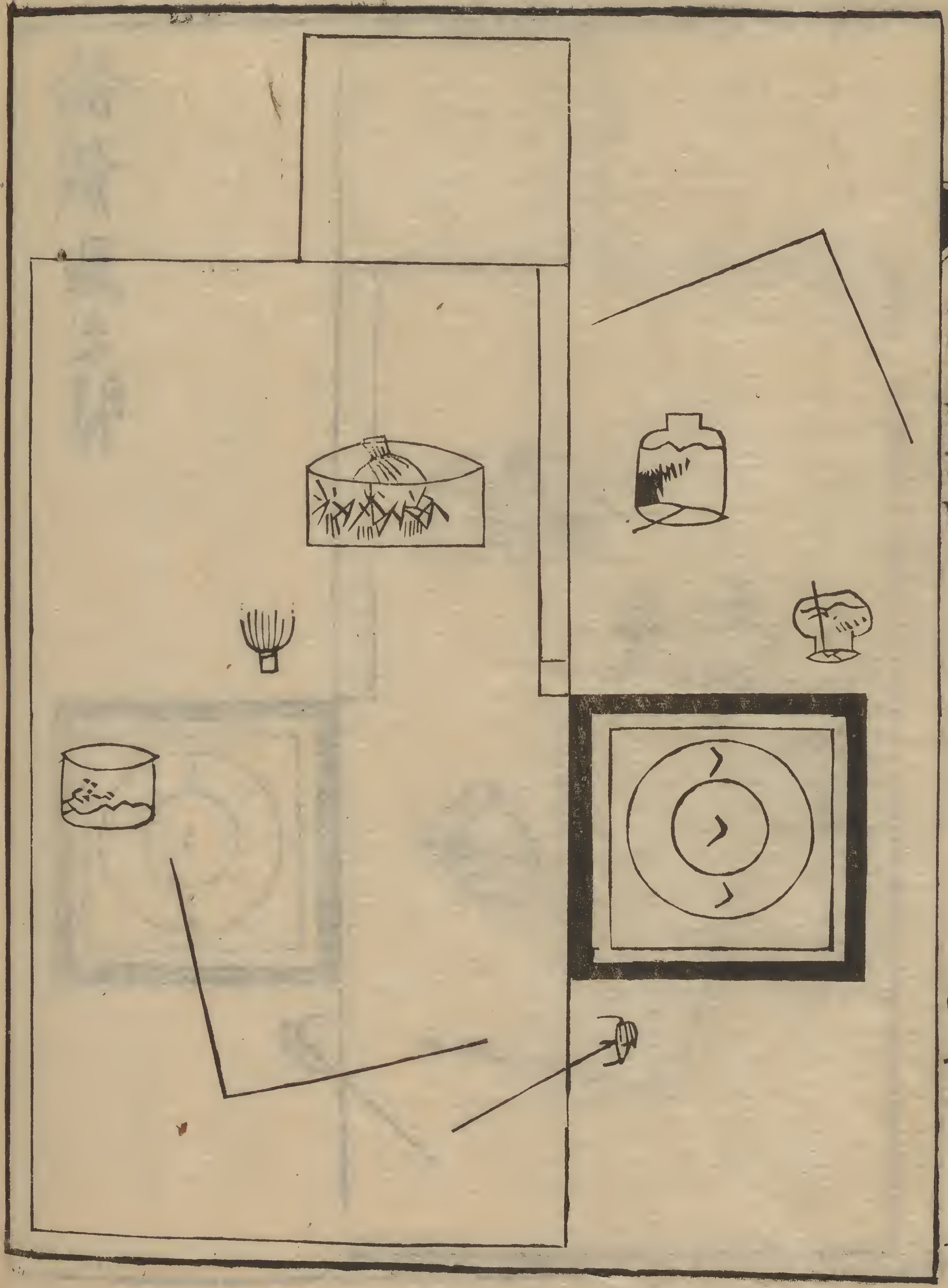
一大事の茶入なりとも時/\ほしてよし
気をかゆる事なし虫をふせぎも底
も能々底のうちの底を付
外に入茶入のうちにそゝぎよく
わろし一すい入て口を紙にてはり
うつむけて口の内に底をつくあけ
茶入の底のうちに一寸あまりおくべし
も底をうけたらばほして置
たなし茶碗にも水をそゝぎつゝ
湯よりとりさましてかたの

あへまする相のものにて下へ大勢の手の中
相のものへし細やかをとをさまへ候事
に入ゆへし翌日一日より三ケ月の茶入
なるはなるべしまとも渋気になる
なるべし
一若茶入に詰ぐるひすればいかにもすゝと
そうしも取気なし先にあるとなれに
つよみをいゆべし茶よ詰る
事もなく渋あらてなるべし
事ある時の内と柄のものにしらずして

論議點之習







一比擬といふハいつもの事にあらすして
とも如何様なる時有なき茶巾なくて
もすかたつくもこの茶を中へ入る主人
まくも状なくも如くの加減にて
なく其墨附湯茶に一つ點しらく
炉乃向ひへ茶筅附置く茶盌をて
まかく八常乃ごとく茶碗よく巾
ひ茶杓をとりて茶碗の中へ入る
出し茶入をひらくらて用茶入
湯をつぐく答の羞とも云しかと

其名插方ハ其用し茶巾をとりて
中にて其出し用をいかなたみ
さしをほ茶出しく縁に結くに
何もこれハあへ出して置し好茶入
其元八出を続も茶杓も同じことを
あいさつハ主人歎の其成事なれとて
またあをたる人ハ切にも細くあかし
先師は然もあを大いなる成れし
仕官を人は此もおさとこしそして八
弟子にしと常にわかり皆られし不及

口傳ニ附る也

此附といふハ何ほどにても茶の湯よ
なるをおもひ語り雷乃何事かかれ
さとり行く何事も我や川あれ我是
自見のお茶ニ志くるものなし
それまでのいのちもあるは物かれ
茶の湯にしみたるおもしろかり

凡此語ニ茶ハ茶の大事なる也
語のよしあしを知といふも此よりおこると
不知何事も何事も仮ものなり　故
先師いつも是をおもはしとまする
此類の心ハ茶湯大事なりと云へとも有
其外の茶湯と云ふ茶湯ハ名を
ありふく語りいふて　故ニ先師ある有
流渇集と號を作りまする　三の茶
湯を志らしとするにならず
其心あしぬ自乃身をも田を十分

夫れ哥ハ白妙乃雪ニ同しあり
しか色てもゆる地に陰りいまても
染させし心ありのつゝる清く旅ハ歌すみ
きよき明暁乃鏡と見るめく明らかなれ
後く朝おの文正つましく其を得
てもとするにも人ニ語ひ貴ニもよし
心ま徳をうしともす心思和めして
誠の志ち天のたよりて雲らも晴れの
ことし　綴ハ春なりせハ草木乃種を
他にも清めとしき師の伝海の恵を

浮く浅ら流乃義なりとなれハ有るを
流ら若らゝれこゝそしるのやきるの
ありしても器を踏く跡よりれハ世の人
こらゝまてかゝる風を綿ゝれを
ちし風心を知らして万の事なるを
取めらけれん生ひらけぬるハ皆絶
先師生ましも以来の心をうけて雲水
液清集と語も亭と又先師の
宗徒らまて去の言葉の趣を去
あらんて古の歌の教も定なりて

とあしと只よ世人は夢ぞと知ハ
ままなるまゝく浮く輪しまへ
えしかうしと識あ里

茶湯真之巻子弖之巻終

延享元年甲子九月

平安弘所書窓

小川新兵衛

小川源兵衛

モノ二